

パンソリ「春香伝」中の諺

—その使用と変容—

柏原 卓

キーワード：パンソリ、朝鮮時代、諺の文脈研究、諺の場面変容、諺の時代差と地域差

[目次]

まえがき

1. パンソリ「春香伝」中の諺—その使用と変容— 【日本語訳】

1-1. はじめに

1-2. 先行研究と研究方法

1-3. 各論

1-4. まとめ

おわりに

まえがき

本報告は2019~20年度「甲南大学総合研究所研究チーム」の課題「東アジア社会における諺と慣用句の研究」(代表者:金泰虎教授)に与えられた研究費による研究のうち、柏原卓の担当部分「日韓の文芸における諺」についての成果報告である。まず研究費を支援くださった甲南大学関係当局と、チーム参加を勧めてくださった金泰虎教授に心からお礼申し上げる。

研究の経過だが、諺を通して過去の文化や思想を窺い知る視点を重視しつつ、文脈付き収集と考察に努めた。1年目は、近世口演文芸の代表作である朝鮮パンソリ「春香伝」と日本説経「さんせう太夫」における諺の使用をテーマにした。2年目は日韓の古典文芸における諺使用をテーマに研究した。成果は国際学会などで発表した。発表題目・学会・所収誌等は下記の通りである。

①パンソリ「春香伝」と日本の説経「さんせう太夫」における諺の研究（韓国語；韓国言語文化教育学会 2019 年秋季大会、韓国・仁荷大学校）

②パンソリ「春香伝」中の諺—その使用と変容—（韓国語；2020 中部東部ヨーロッパ韓国学会国際学術大会、トルコ・Erciyes 大学、リモート開催）

③日韓の文芸における諺使用（日本語；韓国文化学会大会・甲南大学リモート開催、『韓国文化研究』別冊 3 号に再録）

上記成果の中で、諺使用と変容の生き生きした例を解明できている②を代表作と考え、日本語訳して成果報告に代えたい。ちなみに③は既に公刊されている。内容は、近世口演文芸から対象を広げて、日本上代中古の諺の特徴的用例と韓国の三国時代以降の諺資料を見渡している。

なお対象とした諺について、日韓とも中国の故事成句を大量に受容して諺と同様に使用しているが、本研究では原則としてそれらを除外し固有語による諺を主な対象とした。

1. パンソリ「春香伝」中の諺—その使用と変容— 【日本語訳】

1-1. はじめに

諺研究において一作品中の諺を研究することはどの程度価値があるか。諺の数は正確に言えないが無数に多い。ある諺辞典の約 7,000 余項目という例も参考になる。しかし本稿が対象にする諺は 12 個に過ぎない。まさに氷山の一角である。このような場合は一つずつ実際文脈を研究して、諺辞典に見えない情報を追加すればよい。具体的に本稿では「使用状況」、「変化」（場面による変容）、「変遷」（時代差、地域差）を記述しようとする。

春香が「不更二夫」の節を、李夢龍が「百年佳約」を守って愛を貫徹した話は、パンソリを始め小説、演劇、映画から大衆歌謡、児童漫画に至るまで広く愛されてきた。パンソリ「春香伝」の魅力の中の一つが生き生きした表現を作り出す諺である。

パンソリの詞章には異本が多く「春香伝」だけでも数十種あると言うが、本稿では初期の全州版『烈女春香守節歌』を基本資料とし、必要に応じて他の異

本も参照する。研究対象とした諺は、李家源注釈『春香傳』で俗談(諺)と注した12個である。この書の本文は全州版を忠実に活字に翻刻したものである。

第3章各論で12個の諺の使用状況を解明した後、その中の「変化」5個と「変遷」7個について考察する。

1-2. 先行研究と研究方法

1-2-1. 研究の動向

まず「春香伝」の研究と諺研究全般という2領域に分けて簡単に言及する。

(1)「春香伝」に関しては、口碑文学として文学的研究、歴史的研究が多い。詞章に対する注釈書も多種がある。しかし漢文の典拠を提示することに努力を傾注しているものの固有語の諺に注釈した場合は多くない。李家源『春香傳』の注釈中12個程度である。金鉉龍編著『板本 吳 校註 烈女春香守節歌』に1個がある。

金世宗制唱本から諺を抜き出して表現効果を説明したものとして、国立国語院「休止符、終止符」連載の中の「面白い我が国の諺13」(金ヨンヒ)がある。

(2) 諺研究全般では「収集と整理」そして「理論研究」を両輪とする多くの蓄積があるが、最近では藤村美織(1996)の社会学的研究など新しい研究方法が注目されている。また武田勝昭(1996)は文脈付き収集の重要性を指摘した。諺辞典に収録された形態と意味用法を超えて、文脈中の多様な例を考察するための収集である。

(3) 本稿発表者は以前に「パンソリ『春香伝』と日本の説経『さんせう太夫』における諺の研究」(2019)という発表をし、両作品の諺使用方法について対照研究をした。その時の出席者の助言で、「口演者の口調や意図、口演される状況」「記録された時の口語の影響」「地域差・時代差と見るより口頭創作の口伝と見る」という貴重な視角を知った。「口頭創作」については参考論文も告げられた。また「異本の処理」「作品中の諺を一つずつ全て考察せよ」との指摘もあった。この内「口頭創作」というのは「口演する時の口演者自身の創作」の意味であろうが、むしろ民間に既に存在してきた諺を引用したり活用する場合が多かろうと考える。

1-2-2. 研究方法

上記の指摘を参考にして次のような研究方法を取る。

(1) 12個の諺の「使用状況」を解明した後に、その中から「変化」5個と「変遷」7個について考察する。「使用状況」とは、諺を誰がどのような場面でどのような意図で使ったかを内容とする。「変化」は場面による形態等の変容を指す。「変遷」は時代差、地域差だが、現行の諺との比較や、注釈の「方言」という指摘を参考にする。

(2) 対象とした諺は李家源註釈『春香傳』（正音社）で諺と認定した12個である。この注釈書の本文は全州版を忠実に活字に翻刻したものである。この本文を使用しながら必要に応じて金鉉龍編著『板本 吳 校註 烈女春香守節歌』（亜細亜文化社）の影印で確認をした。全州版を基本にして「京板本」（三中堂文庫『春香傳』活字）、「金世宗制唱本」（web）、「晩汀版唱本」（web）、「申在孝辞説」（姜漢永校註『申在孝 판소리 사설（パンソリ辞説）集』普成文化社）を参照した。

	使用状況	変化	変遷
(1)念を入れた塔が崩れ	○	○	
(2)雲雀が麻の実をつく	○		○
(3)鵬が出て鳳が出	○	○	
(4)酸っぱい 実杏	○	○	
(5)苦尽甘来	○		○
(6)女の恨み	○		○
(7)盲人が間違っているか	○	○	
(8)罽毘百年の客	○		○
(9)南風が蟹を瞬くよう	○		○
(10)天方地方	○		○
(11)念を入れた塔が崩れた	○	○	
(12)這い出る穴がある	○		○

<表1>各諺についての考察事項

<表1>にある(1)~(12)の諺について「使用状況」「変化」「変遷」の3つの事項を考察して次章で記述することにする。各事項で考察した諺の位置に○印を付けた。

1-3. 各論

以下に12個の諺の使用状況と変化、変遷について、1-3-1から1-3-3まで記述する。(引用本文のハンゲル古体や綴りの処理に関する部分の日本語訳を省略)

1-3-1. 使用状況

(1) 念を入れた塔が崩れて植えた木が折れるか —説得—

この意味は辞書に「念を入れた塔が崩れるか : 力を尽くし誠意を込めた事は、その結果が必ず無駄にならないこと…」(標準国語大辞典→以下「標準」)と記述されている。形態が「春香伝」では「念を入れた塔が崩れて植えた木が折れるか」となっているが同じ意味である。

使用状況は発端で退妓月梅が「名山大刹に祈って子を生もう」と夫を説得する場面である。夫の成参判が効果を疑うので、月梅が孔子ら昔の中国と朝鮮の例を効果の証拠に上げてからこの諺を引用し、誠心誠意やってみようと強調する。この説得過程を見る時、まず理論的な証拠として漢語を多く交えた中国と朝鮮の故事を言った後に、決断を促すのに感性に訴える固有語の諺を使ったことが興味深い。

(2) 雲雀が麻の実をつつくように —非難—

意味は「雲雀麻の実をつつくように : 絶え間なく小声でしゃべり続ける様子」(標準)である。形態が多少異なる経緯は後に「変遷」で考察する。

使用状況は春香が李夢龍の命令で彼女を呼びに来た房子(召使)を非難する場面である。その台詞は「お前はたわけ者だ。お坊ちゃんがどうして私を知って呼ぶと言うの。お前が私のことを<雲雀麻の実をつつくように>話したと見える」である。房子が李坊ちゃまに春香の話をはひそひそしゃべり続けるようにあれこれ申し上げたのだろうと言う意味で、この諺の卑下的な意味を十分表現している。

(3) 鵬が出て鳳が出、將軍出て竜馬出、南原の春香出て梨花春風華やか 一矜持一

この意味は「鵬が出て鳳が出る : 最も良い連れ合いが現れることを比喩的に言う言葉」(標準)と辞書に記す。続く「將軍出て竜馬出る」も同じ意味の朝鮮時代の諺である(本稿1-3-3変遷を参照)。

使用状況は、月梅が娘春香を尋ねてきた李坊ちゃまを自らが見た吉夢の故に歓迎する場面である。最後に付された「南原の春香出て梨花春風華やか」は、娘春香の教養を自慢し両班(貴族)の子弟と良い連れ合いだと言う意味を表している。

(4) 酸っぱくて渋い満州杏を食べようというのか 一戯弄一

李家源の注釈には「酸っぱくて渋い満州杏」に対して、諺だと記しているだけで他の説明は無い。辞書には「色が良い満州杏 : 表面を見れば美味しそうな色を帯びているが不味い満州杏という意味で、表面だけそれらしくて中身がない場合を比喩的に言う言葉」(標準)、「満州杏を食べた後味 : ほろ苦く渋い後味」(標準)と記述している。「酸っぱくて渋い」と言うのを見ると、後者の「満州杏を食べた後味」を念頭に置いたのではないか。

使用状況は、春香の母の前で百年佳約(夫婦の誓い)をした後、部屋に二人だけで残った李坊ちゃまと春香の遊戯的な問答を描写した「愛の歌」に出てくる言葉である。前後の問答の要旨はこうである。「お前は私を食べる狐か。お前は何を食べようというのか。生栗か、茹で栗か、西瓜に蜂蜜を注いで食べようというのか」「いえ、それも嫌です」「ならば酸っぱくて渋い満州杏を食べようというのか」「いえ、それも嫌です」「ならば豚を食べたいか、犬を食べたいか、私を丸ごと食べようというのか」「もし若様、私が人を食うのをご覧にでもなりましたか」。このような文脈での「酸っぱくて渋い満州杏」の表現意図は解釈が難しい。とにかく多くの言葉で戯弄(ふざけ)しながら親近感を生み出す場面である。

(5) 「興尽悲来」「苦尽甘来」昔からあるが 一実感一

李家源の注釈は「興尽悲来」について漢文の典拠を明示する一方、「苦尽甘来」を諺だとした。後者の意味は「苦尽甘来 : 苦いものが尽きれば甘いものが

来るという意味で、苦勞の末に楽しい事が来ること…」(標準)である。

李坊ちやまが父の昇進のため止むを得ずソウルに上り、残った春香が独り部屋で嘆く場面の中の言葉である。長い台詞の中に「興尽悲来、苦尽甘来、昔からあるが、待つこと少なからず、恋偲んでからも久しいが、一寸の腸にくねくねと結ばれた恨みを君ならぬ誰が解くか」と出て来る。他人についての一般論でなく、自ら悲と苦を痛感して李坊ちやまがこの恨みを解いてくれるのを期待する言葉である。

(6) 女の恨めしい心、五六月に霜が降る —忿怒—

意味は「女の恨めしい(きつい)心、五六月に霜降る : 女がひとたび気分を害して憎むとか恨みを抱けば五六月にも霜柱が下りるほど恐ろしくきつい…」(標準)である。「霜柱」は「霜」であろう。

新任地方長官下学道の誘惑を春香が「不更二夫」を守って固く拒絶するので拷問するが、引き続き拒絶して半死半生で荒々しく答えた言葉である。卑賤な身分の退妓の娘の人権くらいは無視する新任地方長官に対する忿怒が爆発した口ぶりである。一般論でなく自らの切実な心情である。

(7) 盲人が間違っているか、溝が間違っているか —悲運—

李家源の注釈に「諺。諺に『盲人が溝を叱る』と注した。

この形態の意味は「盲人溝を叱る : 溝に落ちた盲人が自分の欠陥を考えずに溝だけを叱るという意味で、自分の欠陥は考えずに罪の無い人や条件のせいにばかりする場合を比喩的に言う言葉」(標準)である。盲人をあざ笑う諺である。

しかし上の標題の形態は、使用状況と意味が異なる。盲人が春香の依頼で夢解きをするため獄に行く途中で溝に落ちて嘆く言葉である。「ああ、ああ、わが運命よ。この世界と天と地、太陽と月と星、物の厚薄長短を知らず、夜中のように過ごしていて、この羽目になったのだなあ。ほんとうに『盲人が間違っているか、溝が間違っているか』だ。盲人が間違っているのであって、始からある溝が間違っていようか」と悲しげに泣く。盲人が自らの視覚障害を悲しむ心情を表現した。

(8) 婿は百年の客 —婉曲—

この意味は「婿は百年の客人（百年之客）なり　：　婿は永遠の客人という意味で、婿は岳父と丈母にとって常に粗略に対応できない存在であること…」（標準）である。李家源の注釈には「婿は百年の佳約を結んだ客人」と若干違うように説明している。

使用状況は、暗行御使（王の密偵）となって零落した乞食の扮装で南原に帰って来た李夢龍が、春香の母に言った言葉である。春香の母が自分をなかなか分らないので「婿は百年の客人と言うから、どうして私を知らないのか」と、間接的に李夢龍であることを知らせつつ軽く粗略さを恨んだのである。

(9) 南風に蟹が目を隠すように　—可笑—

この意味は「南風に蟹目を隠すように　：　食べ物非常に速く食べてしまう様子を比喩的に…」（標準）である。

使用状況は他の項目とは違い口演者による批評である。李夢龍が、香丹（春香の家の使用人）の持って来た冷飯と薬味と水を混ぜて手で一度に食べる場面である。本文は「御使喜んで『飯よ、お前を見てから久しい』、色々を一緒にぶち込み匙に触れることなく手で混ぜて片側に寄せたが『南風に蟹目隠すように』食うのだなあ」の如くである。末尾の「食うのだなあ」という感嘆形で口演者の感嘆を表現した。正体を見せてはいけない暗行御使の迫真感あふれる演技である。

(10) 天方地方　—愛情—

この意味は李家源の注釈に「方向を失いあたふたと忙しく過ごすこと。『東言解』に『天方地方　心忙足忙　何上何下…』と注し、『標準』は「天方地方〔副詞〕非常に急いであたふたとやたらに走り回る様子」と説明している。

使用状況は春香が夜遅く獄を訪ねて来た母に「お母さん、何故いらっしやったの。悪い娘を思ってあたふたと（天方地方）行き来してから怪我しやすいです。これからはいらっしやらないで」と言ったのである。元来「天方地方」には卑下的な含意があるが、ここでは母に対する感謝と申し訳ない気持ちと愛情が感じられる言葉である。

(11) 植えた木が折れ、念を入れた塔が崩れた　—絶望—

この意味は上記（1）を参照いただきたい。辞書に「念を入れた塔が崩れる

か : 力を尽くし誠意を尽くした事はその結果が必ず無駄にならないこと…」と記す。しかしこの言葉の内容は正反対である。一面だけの真実を引用する諺は、時に正反対の諺が有るものである。

使用状況は母と共に李坊ちやまが獄を訪ねて来たと聞いた春香は喜ぶが、彼が及第もできず零落した姿を見て絶望して母に言った言葉である。「漢陽城(ソウル)の旦那様を、七年大干の日照りに喉の枯れた百姓が雨を待つたとしても私ほど誠意を尽くしただろうか。植えた木が折れ、念を入れた塔が崩れた。憐れむべきだ、この私の身の上」と言った。

(12) 天が崩れても這い出る穴がある —葛藤—

この意味は「天が崩れても這い出る穴がある : どんなに困難な境遇に処したとしても生き延びる方途が現れる…」(標準)である。

使用状況は春香が自身の死後に母の悲惨な末路を想像して泣くので、李夢龍が慰める言葉である。この時、暗行御使李夢龍は春香を救う確実な計画を持っているが、正体を現すことが出来ないので「這い出る穴」という言葉が空虚に聞こえるしかなく、心理的葛藤を覚えているのである。

【知見1】 <文脈研究は諺辞典に無い情報を付け加えることが出来る。>

諺の機能論や本質論において諺辞典あるいは研究者の知識に依拠する場合が多いことは周知の事実であろう。諺辞典はそれぞれの諺の形態と意味に関して、多様な文脈から抽象し一般化ないし平均化した記述を掲載する。それを基礎に諺の機能を「真理」とか「教訓」とか「風刺」等々に分類するとしても、その内容は一般化を免れることが出来ない。文脈中の生き生きした活躍の状態を覆い隠す場合もあるであろう。反対に個別文脈に注目すればより多様で絶妙な役割を果たす実例を見ることが出来る。具体的には上記の12項目で「意味」と「使用状況」を比較して見られることを希望する。例えば(1)「念を入れた塔」は所謂「真理」を「説得」場面で根拠として使用したものであるから諺辞典の範囲内と言うことも出来るが、(10)「天方地方」(12)「這い出る穴」で言葉の内に隠れた話者の「愛情」や「葛藤」は諺辞典の範囲を超えている。

下の<表2>で「場面中の表現意図による多様な使用状況」を整理し再確認してみよう。

	意味内容の分類	使用状況
(1)念を入れた塔が崩れ	真理	説得
(2)雲雀の巣の奥つづくように	形容	非難
(3)鵬が出て鳳が出	真理	矜持
(4)酸っぱくて渋い 満州杏	形容	戯弄
(5)苦尽甘来	真理	実感
(6)女の恨めしい心	真理	忿怒
(7)盲人が間違っているか	真理	悲運
(8)響ひ百年の客人	真理	婉曲
(9)南風に蟹目を隠すように	形容	可笑
(10)天方地方	形容	愛情
(11)念を入れた塔が崩れた	反真理	絶望
(12)這い出る穴がある	真理	葛藤

<表2>多様な使用状況

1-3-2. 変化

ここでは「変化」という用語を「表現意図に従って形態を大きく変化させた場合」を指して用いる。上記1-3-1. の中で(1)(3)(4)(7)(11)が該当する。

(1) 念を入れた塔が崩れて植えた木が折れるか

この文句は「念を入れた塔が崩れるか」と「植えた木が折れるか」を接続語尾「て」で結合させたものと言える。前半は今も「念を入れた塔が崩れるか」の形態で使うが、後半は諺辞典に見えないようである。あるインターネットサイトの「木に関する諺」という諺集の中に正にこの用例を書いた物だけを見た。

結合された前後の間の関係はおそらく類似反復であろうが、後半の「植えた木が折れるか」の意味は少し考察する必要がある。「誠意を尽くしてした事はその結果が必ず無駄にならない」という意味の内の「無駄にならない」の部分は「折れるか」が担当するが、果たして「植えた木」が「誠意を尽くしてした事」の部分に該当するか。答えは「そうだ」である。山野に生じた木は燃料として折られるものだが、人が庭や街路に誠意を尽くして植えた果樹や花木のような

ものは無暗に折られないからである。

それならば類似反復の<修辞的意図>は何であろうか。まず口演において<音律を正しく>し、次に違う言い方をすることで<聴衆の理解>を容易にする目的があったと考える。

参考いくつか異本を確認したが、名山大刹に折ろうと説得する場面自体がまるで無く比較できなかった。しかし『申在孝パンソリ辞説集』「春香歌<男唱>」中には、房子が李坊ちゃまに春香の出生経緯と履歴を言う場面があって「(月梅が) 四十を超えた後に成千総と結ばれ子を得ようと、智異山の各寺刹に百日山祭、供物をし、一日十五日には沐浴齋戒し閔帝廟に香を炊いて祈り、至誠天に通じて巧く身ごもった」と言った。これを全州版と比較すれば、「子を得ようと」の次に説得場面が無く「念を入れた塔云々」という月梅の説得する言葉も無い。結局「植えた木が折れるか」という文句はいくつかの異本や諺辞典では確認できなかった。全州版に依拠すれば某口演者の特有の添加かも知れない。朝鮮時代当時の諺なのか口演者が新たに作った諺か現時点では明白ではない。

(3) 鵬が出て鳳が出、將軍出て竜馬出、南原の春香出て梨花春風華やか

この文句は「鵬が出て鳳が出る」「將軍出て竜馬出る」という2個の似た諺を繰り返した次に、それらの形態を真似てパロディー(parody)手法で「南原の春香出て梨花春風華やか」を新たに加えた。単純に「春香出て李坊ちゃま出る」としない機知に富んだ表現である。「南原」が現場の地名だけでなく「南の原」として「春風」すなわち「春の香り」を修飾する。その春香が南原に出たから、李坊ちゃまという美しい「梨花」と春香という「春風」すなわち暖かい春風が良い連れ合いになって「華やか」で美しいという、豊富な内容を含んでいる。

(4) 酸っぱくて渋い満州杏を食べようというのか

李家源の注釈に「諺」とだけ注した。しかし諺辞典にはこの形態が搭載されていない。代りに意味が近いものとして「満州杏食べた後味」がある。事実は確かでないが、有名な「愛の歌」中で「何々を食べようというのか」という質問形式を反復するが、「何々」は名詞でなければならないから「酸っぱくて渋い満州杏」という名詞句を作り出したのではないか。

異本を見ると、金世宗制唱本と萬汀版にこの文句が伝わっている。

(7) 盲人が間違っているか、溝が間違っているか

上記 3.1. で記述したように諺「盲人溝を叱る」を変化させたものと思われるが、形態が大きく変わったのと同時に視点が変わった。諺「盲人溝を叱る」は他人が盲人をあざ笑う「他人視点」であるのに比べて、盲人の台詞である「盲人が間違っているか、溝が間違っているか」は盲人が自分の障害を嘆く「自己視点」である。言い換えれば盲人の台詞である故に当然に盲人の「自己視点」に変わらざるを得なかったのである。

(11) 植えた木が折れ、念を入れた塔が崩れた

この文句は上記(1)と似ているが「念を入れた塔云々」と「植えた木云々」の順序が反対になった上に、「折れるか」ではなく「折れた」に替ることで意味が反対に「否定（反語）」から「既成事実」に変化した。すなわち(1)「誠意を尽くしてした事は結果が無駄にならない」から(11)「結果が無駄になった」に変化したのである。

【知見 2】 <表現意図に従って形態を大きく変化させた場合がある。>

この節の「変化」で見えて来た例は、諺を文脈に合うように加工した結果、形態が目に見える程度に変化したものである。これらを口演者や詞章作者の創作と言っても誤りではない。しかし一方に加工しない諺を使っている場合も多く有る。それらまで口演者や詞章作者の創作と言ってはいけない。やはり大部分の諺を「昔から民間に伝えてきたもの」と見るのが妥当である。

	原形	出現	技法
(1)	念を入れた塔が崩れるか	念を入れた塔が崩れ、植えた木が折れるか	対句
(3)	鵬が出て鳳が出る 將軍出て竜馬出る.	鵬が出て鳳が出、將軍出て竜馬出、 南原の春香出て梨花春風華やか	対句 パロディー
(4)	満州杏食べた後味	酸っぱくて渋い満州杏	変形
(7)	盲人溝を叱る	盲人が間違っているか、溝が間違っているか	変形
(11)	念を入れた塔が崩れるか	植えた木が折れ、念を入れた塔が崩れた	否定 対句

<表 3> 変化 一目立つ形態変化一

1-3-3. 変遷

「変遷」は時代差と地域差である。古語と現代語、方言と別の方言や標準語との間の差異を指す。時間や地域を経過して形態や意味が変化することである。上記の「変化」と違って、単語次元が中心である。

ここでは差異が見える(2)(6)(8)(10)(12)と共に、差異が別に見えない(5)(9)も注目する。現代と朝鮮時代が同一である場合は其諺の起源を少なくとも朝鮮時代まで遡れるからである。また地域差が無ければ全国共通の形態と意味であったと見ることが出来る。

(2) 雲雀が麻の実をつつくように

李家源の注釈に「諺。『중지리새 (雲雀)』は『중달새』の方言。あるいは『중지조 (従地鳥)』。『열씨 (麻の実)』は『삼씨』の方言。麻子」とする。

これらの方言に関して辞書に「중지리새 [名] 動物。→ 중다리 (標準)、「열씨 [名] 삼씨의方言 (咸北)」(高麗大学校韓国語大辞典、以下「高麗」と略す)と書かれている。そして「雲雀麻の実つづくように [北朝鮮語] 絶え間なくしゃべる様子を…」(高麗)とも言う。この諺を北朝鮮語とする理由は良く分からない。しかし事実なら、パンソリ口演者の根拠地が湖南地方すなわち全羅道であったこととの関係をどう説明すべきか不審である。これと関連して「중지리새/중달새/중다리 (雲雀)」「열씨/삼씨 (麻の実)」の全国方言分布を知り、分布の経緯を言語地理学的に考察できればと思う。(利用しやすい)『全国方言大辞典』を期待するものである。

(5) 「興尽悲来」「苦尽甘来」昔からあるが

李家源の注釈に「興尽悲来」には漢文出典を明記するが、「苦尽甘来」には諺とだけ記した。この書で諺とするのは固有語が原則であるが、「苦尽甘来」は漢文である。なぜ諺だと書いたのであろうか。朝鮮時代に『耳談』『旬五志』『東言解』のような、固有語の諺を漢文表記して見出し語とし、漢文で意味を説明した漢訳諺集が有るには有る。然るに出典を全く書いていない。思うに漢文の出典を知ることが出来ずに止むを得ず「諺」扱いしたのではないか。

じつは「苦尽甘来」は現代中国語にも有り、「百度百科」に「苦尽甘来, 汉语成语, 出自《西厢记》」と明記している。『西廂記』は中国元時代の雑劇で

ある。李家源の注釈書の数多い参考文献中に『西廂記』は無い。おそらく元・明時代に中国から入って来た成語を音読したのが広く民間に普及したのではないか。

(6) 女の恨めしい心、五六月に霜が降る

李家源は「諺。劉安の〔淮南子〕に『鄒衍事燕恵王尽忠、左右讃之、王繫之獄、仰天而哭、夏五月天為之下霜』、張説の〔玉箴〕に『匹夫結憤、六月飛霜』、鄭麟趾の〔高麗史 列伝〕に『一女怨天、六月霜降』と注した。これに従えば中国故事に由来する固有語の諺であり、元来「鄒衍…仰天而哭」「匹夫結憤」のように男の心情であったが、『高麗史』（朝鮮文宗 1年 1451）に至って「一女怨天、六月霜降」と女の心情に変わった。この漢文の文句を固有語に移して諺になったのである。

ところが現代の辞書には「女の恨めしい（きつい）心、五六月に霜降る : 女は一度心が振じれて憎んだり恨みを抱けば五六月にも…=女が恨みを抱けば五六月にも霜が降る」(標準)と記している。興味深いのは見出しの諺の中で「恨めしい（きつい）」と換言したことである。

まず「恨めしい心 곡(曲)한 마음」の内「곡(曲)한」の意味が近ごろになって諺の文脈に合わない感じがして、「독(毒)한」という換言をしたのではないか。事実、三中堂文庫『春香傳』は全州版に依拠した活字化を原則としているが、容易に解釈するため「抱いた恨み」に替えた。理解しやすいと共に『高麗史』の「一女怨天、六月霜降」とも似ている。また「女が恨みを抱けば」(標準:「同じ諺」)とも似ている。

(8) 婿は百年の客

文脈は「婿は百年之客と言うから、どうして私を知らないものか」であるが、李家源の注釈は「婿は百年之客なり」という部分を諺と認定し、これに対して「諺。婿は百年の佳約を結んだ客人」と注した。一方、辞書は「婿は百年の客人なり : 婿は永遠の客人という意味で、婿は岳父・丈母にはいつでも粗略に対応できない存在…」(標準)のように記述している。(高麗)も似た説明である。辞書のような解釈が有力ではないか。

別の問題で、この諺から派生した次のような諺が近ごろ広く普及している例

を付け加えてみる。「婿は百年の客人なり、嫁は終身の家族なり : 本来他の家の子である嫁は自家の人になっても気楽だが、婿はどうしても難しい客人のようであり続ける」(児童書『小学校の教科書に出る諺の解釈』)。

(9) 南風に蟹が目を隠すように

李家源の注釈に「諺。『마파람 [マパラム]』は南風の貶称。麻風。『게눈 [ケヌン]』は蟹眼。飲食を何時の間に食べたのか分からないほど速く食べてしまうことを言う言葉」と注した。現代と同じであるから少なくともパンソリの時代から変わり無く伝えて来たことが分かる。

ただし「마파람 (맛마람) [マパラム・マッパラム]」という単語が興味深い。辞書には「舟人たちの隠語で南風を言う言葉 ≡ 景風、麻風、前の風、午風」とする。「마 [マ] (麻)」が南を意味する理由は良く分からないが、一部に「앞 [アプ] (前)」が音韻変化で「마 [マ]」になり、南側を「앞 [アプ] (前)」と呼ぶ集団で生じた単語」という推測が有る。真偽のほどは地理、歴史、等各方面から慎重に考察してみなければならぬ。

(10) 天方地方

李家源は「諺。方向を失いあたふたと忙しく過ごすこと。[東言解]に『天方地方 心忙足忙 何上何下』」と注した。『東言解』は朝鮮時代の漢訳諺集で、朝鮮の諺を漢文に翻訳して意味を漢文で説明した諺集である。『東言解』の説明中の「心忙足忙」が「あたふたと忙しく過ごす」という部分に該当し、「何上何下」が「方向を失い」に該当する。ところが「天方地方」は固有語ではないが「東言」すなわち朝鮮の諺と認識したのである。現代に入って同じ諺として「天方地軸」も使われるようになった。

(12) 天が崩れても這い出る穴がある :

辞書に「天が崩れても這い出る穴がある : どんなに困難な境遇に処したとしても生き延びる方途が現れるという言葉」(標準)と記述している。「穴」を春香伝に「구기 [クンギ]」、辞書に「구멍 [クモン]」とする他は同じである。朝鮮時代から現代まで伝わる諺で前記の児童書『小学校教科書に出る諺の解釈』にも紹介される程である。

次に「구멍 [クモン]」と「구기 [クンギ]」に「関しては、現代語구멍 [ク

モン)』に対してパンソリの「궁기 [クンギ)」が古語だと言える。さらに地域差もあって、辞書には「궁기 [クンギ) [名詞] 方言。구멍 [クモン) の方言 (濟州、咸鏡)」(高麗)と記す。全国分布についてより多くの情報が必要であるが、古語「궁기 [クンギ)」は首都では無くなり周辺地域にだけ残っているようである。

【知見3】 <大きな変化は無くても単語次元で時代差や地域差を発見できる。>

>

以上見たように、諺の形態は似ていても単語次元で見ると、方言や古語として地域差や時代差を帯びたものが有る。簡単に整理すると下の<表4>のようである。「差異」項目中の∩印は積習合の記号で「～であり」「～であると共に」と理解すれば良い。

ここで一二付言する。前節の「変化」中にも変遷を発見できるが、変化の面を主な問題と見て変遷の面は省略した。また、全州版「春香伝」において諺だけでも相当数の「変遷」例があることから見て、本文全体ではより多くの変遷を見られるのではないか。古典文学コーパスが有ればと思う。

	単語	差異
(2)	종지리새 (雲雀)	方言∩古語
(2)	열씨 (種、実)	方言∩古語
(5)	고진감래 (苦盡甘來)	漢語
(6)	곡(曲)한 (振じれた、恨めしい)	古語
(8)	百年之客	古語
(9)	마과람 (南風)	方言∩位相語
(10)	天方地方	方言∩漢語
(12)	궁기 (穴)	方言∩古語

<表4> 変遷 — 差異の種類

1-4. まとめ

今回の研究を通して武田勝昭(1996)が強調した「諺の文脈付き収集」の有効性と大切さを確認できた。すなわち諺辞典の次元を超えて、生き生きした使用状況と共に多様な変容を見ることが出来た。詳細は省略するが研究結果として次のような知見を得た。

[知見1] 文脈研究は諺辞典に無い情報を付け加えることが出来る。

[知見2] 表現意図に従って形態を大きく変化させた場合がある。

[知見3] 大きな変化は無くても単語次元で時代差や地域差を発見できる。

今後この成果をどう生かすことが出来るであろうか。まず「春香伝」の生き生きした使用状況と変化の実例は、諺の本質論と機能論に良い材料を提供し、他の時代や作品を見る時にも参考になるであろう。次に「春香伝」は諺だけでなく方言と古語の実例も提供する。一つ一つの用例が方言史学、国語史学の窓かつ資料であると言える。

一方、今後備えるべき点もある。まず古典中の諺注釈が必要である。「春香伝」だけでも中国の故事成語についての注釈は多いが、固有語の諺に関しては説明どころか諺であることさえ表示が無い。しかし李家源註釈『春香傳』は例外のようである。次に、上記の方言史学と国語史学の窓という面で「全国方言辞典」と「古典コーパス」「現代語コーパス」が必要である。コーパスは文脈を知るためである。筆者の知識不足のせいかわからないが KAIST corpus を使用しづらく、国立国語院の検索も文脈収集が難しかった。検索語「諺」で用例(文学、実用書、新聞等)を探せるウェブサイトが有れば良いであろう。

おわりに

以上に紹介した2年度分の研究成果の特徴と今後の課題を簡単に記す。

全体を通じて、近世以前の文芸資料を主たる調査対象として、文脈付き収集の有効性を確かめる過程であった。

2019年度は、日本の説経「さんせう太夫」や朝鮮のパンソリ「春香伝」という口演文芸を対象として諺使用の状況を精査した。どちらも諺辞典に無い生き生きした情報を加えることが出来た。特に「春香伝」については12例すべてに

ついて、文脈中の「使用状況」を解明しつつ、意図的な「変化」と、用語の時代差・地域差を反映した「変遷」という観点を指摘して実例を検討した。

2020年度は、古典文芸における諺資料にどのような物が有るかを、主要なものに限られたが用例を示しつつ展望した。従来こうした先行研究は見当たらないので、今後の研究への道案内として役立つ内容になったと言える。

最後に今後の課題について記す。筆者が実行した文脈付き収集は諺の生き生きした使用状況を見せてくれたが、「木を見て森を見ない」弊害を避けるには、先行の諺辞典や諺研究に目配りして、常に諺本質論・諺機能論への照射を意識することが大切である。

さらに、今回チーム研究には「諺を通して国際的かつ歴史的に文化や思想を窺い知る」狙いが込められていたが、拙稿に限って言えば、個々の用例を通して自ずと感じ取られるものの（特に成果③）、これを正面からテーマにするまでには至らなかった。今後の課題の一つと言える。

また現時点における諺検索の不自由を嘆いているが、今後の改善に敏感に追いついていくことも必要な課題である。

<参考文献>

- ・金鉉龍編著(1992), 『板本및校註 烈女春香守節歌』, 亞細亞文化社
- ・全圭泰註解(1980), 『春香傳』, 三中堂文庫,
- ・姜漢永校註(1978), 『申在孝관소리사실集』 「春香歌<男唱>」, 普成文化社
- ・李家源註釋(1975), 『春香傳』, 正音社
- ・김세종제 춘향가 사실 (김경아 창), 사단법인 우리소리
金世宗制春香歌辭說 (김기영 노래)
- <https://pansory.com/category/관소리의%20이해/춘향가%20사실> (検索日:2020. 05. 15)
- ・재미있는 우리 속담 13 ' (김영희 글), 국립국어원 '샘표 마침표'
「面白い我が国の諺13」 김윤호著 国立国語院「休止符 終止符」
- <https://news.korean.go.kr/index.jsp?control=page&part=view&idx=8798>
(検索日:2020. 05. 15)

- 국립국어원 『표준국어대사전』 国立国語院『標準国語大辞典』
<https://stdict.korean.go.kr/search/searchDetailWords.do>
- 고려대학교 『한국어대사전』 (NAVER 국어사전)
高麗大学校『韓国語大辞典』 (NAVER 国語辞典)
<https://ko.dict.naver.com/?version=1>
- 武田勝昭(1996), ことわざ学の展望, 『月刊言語』Vol. 25 No. 7, 大修館書店
- 藤村美織(1996), 時代と共に生きることわざ, 『月刊言語』Vol. 25 No. 7, 大修館書店